

日本NGO支援無償資金協力（日本NGO連携無償資金協力）

事業完了報告書

1. 事業名:ラオス国立大学医学部(現 ヘルスサイエンス大学)および地方核病院スタッフに対する感染症予防専門家養成プロジェクト
2. 実施団体名:特定非営利活動法人 歯科医学教育国際支援機構 (OISDE)
3. 実施期間:平成 18 年 11 月 1 日 ~ 平成 19 年 10 月 30 日
4. 事業の概要:この事業は、ラオス人民民主共和国(以下ラオス)の健康状態の改善を将来目標として行われた。ラオスの社会指標からは平均寿命(52.5 歳)、乳幼児死亡率(9.3%)、5 歳未満死亡率(11.1%)、40 歳未満死亡率(30.5%)のどれも劣悪であり、衛生状態や医療保健設備の未整備がうかがえる。事実、医療供給システムの整備の遅れは深刻で、現在、医師、歯科医師、薬剤師などの養成は首都ヴィエンチャンにあるヘルスサイエンス大学(2007 年 4 月よりラオス国立大学医学部から名称変更)が担っているが、それら医療職の供給体制における教育システム、教育資材、教員レベルあるいは付属の病院等の設備は極めて貧弱である。このような医療整備の遅れに加え山岳地勢さらに多民族国家という事情のため、ラオス全土の健康の実態は十分に把握されておらず、そのため、国民の健康状態改善への取り組みも非常に難しいものになっている。感染症はこのような後発発展途上国の特徴的な疾患であり、正確な数字は明らかではないが、多くの国民が感染症に苦しんでいることは想像に難くない。しかし、本法人が調査をおこなった 2002 年から 2004 年の段階では、感染症を指導できる医師らの能力が著しく劣っており、首都ヴィエンチャンを除く他地域では感染症(口腔感染症)を管理する医師、歯科医師、看護師がほとんどいなかった。そこでこの事業では、ラオス国民の健康状態改善のための一歩として、感染症(口腔感染症を含む)専門家養成の焦点を当てて活動をおこなった。ヘルスサイエンス大学のスタッフには、感染症専門家養成コースとして11名の医師、歯科医師を対象に、うち 9 名には、28 回に及ぶ集中講義・実習を、残り 2 名には感染症診断が可能な技術者の養成トレーニングを 13 回(現地に日本人専門家を招聘)行い、その後フォローアップとしてインターネットを通して継続的なトレーニングを行っている。及びに地方核病院でのトレーニングとしては 7 回にわたって基礎研修をおこなった。現在、本法人が日本大学医学部病態病理学系と共同で、日本 NGO 連携無償資金協力で申請中の案件「巡回型診療を応用したラオス・サワナケート(Savannakhet)村落地域における母子保健の改善—ハイリスク妊産婦への対応と B 型肝炎、HIV 感染、口腔感染等の感染症予防プロジェクト—」では、これら基礎研修を受けた研修医らが、活

動拠点であるサワナケートの核病院であるサワナケート病院と協力し、カウンターパートとして活躍することが期待される。

5. 事業目標と上位目標

5-1. 事業目標

- 1) ヘルスサイエンス大学および地方核病院における感染症予防に対する知識の普及及び実務研修
- 2) ヘルスサイエンス大学医学部及び地方核病院に対する感染症予防センターの設立

5-2. 上位目標(事業終了後将来的に達成したい目標)

- 1) 医療マップの作成可能な人材の育成
- 2) ラオス独自の感染症予防システムを構築する
- 3) ラオス国立大学医学部において感染症に対する理解力と予防プロジェクトの実施能力が向上される
- 4) 地域に応じた疾患予防啓発と医療環境の整備に対する理解能力の向上

6. 事業のコンセプト

- 1) ラオスの貧困を背景とした健康被害に対し、特に感染症に注視し、その予防およびトータル・ヘルス・ケアの概念に基いたプライマリー・ヘルス・ケア実施の可能な人材を育成する
- 2) ヘルスサイエンス大学および地方の核病院に対し、感染症予防センターを設立し、ハード・ソフト面での支援をする
- 3) 上記のマンパワーを活用しラオス全土のメディカル・マップを作成する
- 4) メディカル・マップのデータに準じラオスにおける感染症予防プログラムのプライオリティーを作成する

7. 活動内容

7-1. ヘルスサイエンス大学スタッフに対する感染症予防専門家育成活動 その1.

- 1) 研修形態: 講義/実習
- 2) 講義回数: 28回 (69時間)
- 3) 受講者: 9名 (医師2名・歯科医師7名)

受講者一覧

1	Dr. Vanpheng VIENGMANY
2	Dr. Engphone HOUNGBOUNYUANG

3	Dr. Manisoth KESONE
4	Dr. Maiboun SYMALAVONG
5	Dr. Phonemany PHIPHACPHOMMACHANH
6	Dr. Phaythoune SIRIRANONH
7	Dr. Viengsay THAMMAVONGSA
8	Dr. Anong PHOMMANIVONG
9	Dr. Sathaphone SOULYYACHAN

4) 実施場所:ヘルスサイエンス大学

(5月4日、6日はフィールドワークのためそれぞれ Bolikhamsai 県、Vientiane 市内の小学校)

5) 養成コース講義・実習内容、時間一覧

No.		日時	講義内容	講義時間	講師
1	2006	12月19日	感染症概論 (感染症の種類、症状、診断、予防、治療)	2	早川智(日本大学医学部)
2	2006	12月19日	感染症・医療従事者の感染症予防	2	早川智(日本大学医学部)
3	2006	12月20日	感染症予防・予防接種	2	早川智(日本大学医学部)
4	2006	12月20日	感染症の臨床検査	2	早川智(日本大学医学部)
5	2007	1月22日	婦人科領域感染症・性感染症、HIV・(種類、症状、診断、予防、治療)	2	早川智(日本大学医学部)
6	2007	1月22日	ウイルス・基礎	2	早川智(日本大学医学部)
7	2007	1月23日	ウイルス・基礎	3	早川智(日本大学医学部)
8	2007	1月23日	感染症疫学・肝炎	2	早川智(日本大学医学部)
9	2007	2月22日	学校保健	3	本田和也、網干博文、本橋正史・柳澤宗光(日本大学歯学部)
10	2007	3月19日	感染症と微生物	2	落合邦康(日本大学歯学部)
11	2007	3月19日	感染症と微生物	2	落合邦康(日本大学歯学部)
12	2007	3月20日	感染症病態	2	落合邦康(日本大学歯学部)
13	2007	3月20日	感染症病態	2	落合邦康(日本大学歯学部)
14	2007	5月3日	疫学	3	本橋正史(日本大学歯学部)・柳澤宗光(日本大学歯学部・OISDE)
15	2007	5月3日	疫学	3	本橋正史(日本大学歯学部)・柳澤宗光(日本大学歯学部・OISDE)
16	2007	5月4日	疫学実習 (Bolikhamsai 県)	7	本橋正史(日本大学歯学部)・柳澤宗光(日本大学歯学部・OISDE)

17	2007	5月6日	疫学実習 (Vientiane Capital)	6	本橋正史(日本大学歯学部)・柳澤宗光(日本大学歯学部・OISDE)
18	2007	6月3日	熱帯環境学、免疫と熱帯医学、老化と感染	2	宮田隆(OISDE・日本大学)
19	2007	7月29日	感染症・発疹性疾患	2	落合邦康(日本大学歯学部)
20	2007	7月29日	熱帯感染症	2	落合邦康(日本大学歯学部)
21	2007	7月31日	熱帯感染症	2	落合邦康(日本大学歯学部)
22	2007	7月31日	感染症予防・自然免疫、獲得免疫	2	落合邦康(日本大学歯学部)
23	2007	9月12日	咀嚼	2	佐藤吉則(日本大学歯学部)
24	2007	9月12日	院内感染	2	齊藤毅(日本大学歯学部名誉教授)
25	2007	9月30日	口腔感染症、歯周感染症と全身疾患	2	伊藤公一(日本大学歯学部)
26	2007	9月30日	歯周感染症の疫学と診断、歯周感染症の治療	2	伊藤公一(日本大学歯学部)
27	2007	10月23日	研修生によるプレゼンテーション	2	Assoc. prof. Sengphouvanh Ngonphady (ヘルスサイエンス大学)
28	2007	10月23日	評価・自己エバリュエーション	2	Assoc. prof. Sengphouvanh Ngonphady (ヘルスサイエンス大学)

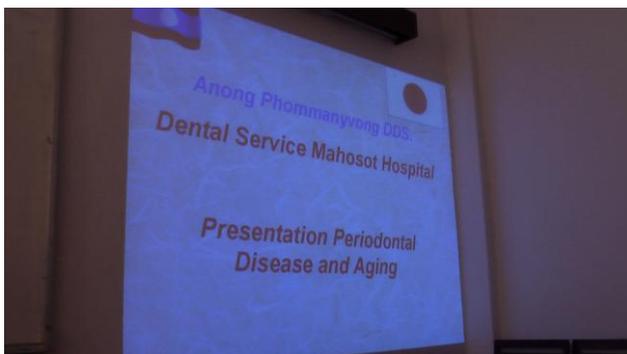
6) 活動写真



(上) 落合邦康先生による講義の様子



(左)宮田隆先生による講義の様子



(上)研修生のプレゼンテーションの様子



7-2. ヘルスサイエンス大学スタッフに対する感染症予防専門家育成活動 その2.

(感染症診断の出来る検査技師の育成)

- 1) 研修形態: 講義 / 実習 / 通信講座
- 2) 研修回数: 13 回 (35 時間) (講義 / 自習)、4 月 ~ 10 月 (通信講座)
- 3) 受講者 2 名 (医師)

受講者一覧

Dr Vienvansay*	医師
Dr Loungnilanh	医師

*責任者

- 4) 実施場所: ヘルスサイエンス大学大学病院 セタティラート病院
- 5) 講義・実習内容、時間一覧

No.	年	日時	研修形態	研修内容	講義時間	講師
1	2006	10月27日	講義	PCRを使った感染症診断1	2	嶋田浩一(日本大学歯学部)
2	2006	10月27日	講義	PCRを使った感染症診断2	2	嶋田浩一(日本大学歯学部)
3	2006	12月19日	実習	PCR導入・使用方法の説明・実習1	3	嶋田浩一(日本大学歯学部)
4	2006	12月19日	実習	PCR導入・使用方法の説明・実習2	3	嶋田浩一(日本大学歯学部)
5	2006	12月20日	実習	PCRトレーニング 1.1・バクテリアサンプル	3	嶋田浩一(日本大学歯学部)
6	2006	12月20日	実習	PCRトレーニング 1.2・バクテリアサンプル	3	嶋田浩一(日本大学歯学部)
7	2007	1月25日	講義	講義・PCRの活用法	1	早川智(日本大学医学部)
8	2007	1月25日	実習	PCRトレーニング 2・血液サンプル	3	早川智(日本大学医学部)
9	2007	1月25日	実習	PCRトレーニング 3・細胞サンプル	3	早川智(日本大学医学部)
10	2007	3月20日	実習	クラミジア検査1	3	嶋田浩一(日本大学歯学部)
11	2007	3月20日	実習	クラミジア検査2	3	嶋田浩一(日本大学歯学部)
12	2007	3月21日	実習	結核検査1	3	嶋田浩一(日本大学歯学部)
13	2007	3月21日	実習	結核検査2	3	嶋田浩一(日本大学歯学部)

フォローアップ

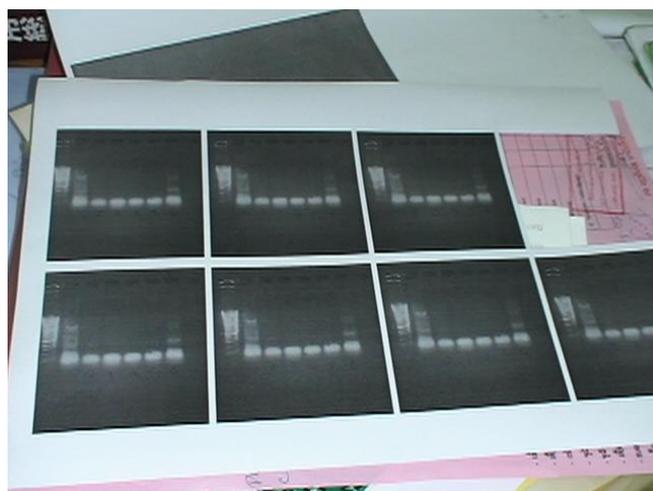
月	研修形態	研修内容	講師
4月	インターネット	クラミジア検査	嶋田浩一(日本大学歯学部)
5月		PCR 実用・結果の正しい読み方	嶋田浩一(日本大学歯学部)
6月		クラミジア検査	嶋田浩一(日本大学歯学部)
7月		PCR 実用・結果の正しい読み方	嶋田浩一(日本大学歯学部)
8月		PCR 応用	嶋田浩一(日本大学歯学部)
9月		PCR 応用・異なる試薬の使い方	嶋田浩一(日本大学歯学部)
10月		クラミジア検査 実践	嶋田浩一(日本大学歯学部)

6) 活動写真



(左) Setthathirath 病院にて感染症診断(PCR)トレーニングを受ける Viengvansay 医師

(右) PCR検査の結果



7-3. 地方核病院での講習

- 1) 研修形態: 講義/実習
- 2) 回数: 7回 (16時間)
- 3) 受講者: Bolikhamsai 県 Pakkading 地区のヘルスセンタースタッフ(3名)
Pakkading 地区の小学校教員
- 4) 実施場所: Bolikhamsai 県 Pakkading 地区

5) 講習内容、時間一覧

No.	年	日時	研修形態	研修内容	講義時間	講師
1	2006	11月22日	講義・実習	感染予防	2	宮田隆(OISDE・日本大学)
2	2006	12月22日	講義・実習	感染予防	2	嶋田浩一(日本大学歯学部)
3	2007	2月23日	講義・実習	学校保健	2	本橋正史(日本大学歯学部)・柳澤宗光(OISDE・日本大学歯学部)
4	2007	3月22日	講義・実習	感染予防	2	嶋田浩一(日本大学歯学部)
5	2007	5月4日	講義・実習	学校保健	3	本橋正史(日本大学歯学部)・柳澤宗光(OISDE・日本大学歯学部)
6	2007	8月10日	講義・実習	栄養	2	齋藤志野(OISDE, 中京短期大学)
7	2007	9月14日	講義・実習	感染予防	3	宮田隆(OISDE・日本大学)

6) 活動写真



(左)嶋田浩一による Pakkading 地区での感染予防に関する講義・実習

(下): Bolikhamsai 県 Pakkading 地区病院





(左)宮田隆先生から指導を受け実習する様子。

8. 投入

8-1. 感染症専門家養成のための投入機材

	個数	資金	設置場所
テキスト			
ハリソンの内科書	1	OISDE	ヘルスサイエンス大学
Infection and Immunity	10	OISDE	ヘルスサイエンス大学
Micro-Biology	1	自己資金 (落合邦康氏寄贈)	ヘルスサイエンス大学
各講師の配布資料	10部	自己資金(各講師寄贈)	ヘルスサイエンス大学
実習室の整備			
デンタルユニット	2	外務省	ヘルスサイエンス大学
超音波スケーラ	1	外務省	ヘルスサイエンス大学
備品	多数	OISDE	ヘルスサイエンス大学

エアコン	1	OISDE	ヘルスサイエンス大学
実習のための消耗品	多数	OISDE	ヘルスサイエンス大学
講義室の整備			
ノートパソコン		ヘルスサイエンス大学	ヘルスサイエンス大学
プロジェクター		ヘルスサイエンス大学	ヘルスサイエンス大学
ホワイトボード		ヘルスサイエンス大学	ヘルスサイエンス大学
棚		OISDE	ヘルスサイエンス大学
窓ガラス		OISDE	ヘルスサイエンス大学
ドア		OISDE	ヘルスサイエンス大学
床		OISDE	ヘルスサイエンス大学
流し台		OISDE	ヘルスサイエンス大学
壁		OISDE	ヘルスサイエンス大学
エアコン		OISDE	ヘルスサイエンス大学

8-2. 感染症センター設置のための投入機材

機械

機械名	個数	資金	設置場所
ペルチェ式温度コントローラー LittleGene 東洋紡績(株)	1	外務省	Setthathirath 病院 (STR病院)
ゲル撮影装置 DigiDoc-it System フナコシ 97-0105-01	1	外務省	STR病院
電気泳動装置 ミューピッド-2plus	1	外務省	STR病院
小型遠心機 マイクロA フィッシャーサイエンティフィック 04-977ARX60	1	外務省	STR病院
ボルテックスミキサー ジェニー2 エムエス機器	1	外務省	STR病院
UVP トランスイルミネーター TFS-20 254nm フナコシ 95-0319-03	1	外務省	STR病院
変圧器 アップダウントランス IT-18	1	外務省	STR病院
電子レンジ	1	外務省	STR病院
スターラー	2	自己資金 (早川智氏寄贈)	STR病院
計量器	1	自己資金 (早川智氏寄贈)	STR病院
乾式恒温槽	2	自己資金 (早川智氏寄贈)	STR病院
温度計	1	自己資金 (早川智氏寄贈)	STR病院
吸光度計	1	自己資金 (早川智氏寄贈)	STR病院
冷凍庫	1	OISDE	STR病院
ノートパソコン	1	OISDE	STR病院
実験道具	多数	自己資金 (落合邦康氏寄贈)	STR病院
電気泳動装置	1	自己資金 (落合邦康氏寄贈)	STR病院
プリンター	1	自己資金 (落合邦康氏寄贈)	STR病院

試薬

試薬名	個数	資金	設置場所
アガロースS 100g 和光 312-01193	1	外務省	STR病院
6xLoading buffer 1mlx3 和光 314-90261	1	外務省	STR病院
One step Ladder 100 500ul 和光 313-05241	1	外務省	STR病院
50xTAE バッファー 500ml 和光 313-90035	1	外務省	STR病院
脱塩蒸留水 無菌 DNase RNase free 100M L 316-90101	1	外務省	STR病院
PureTaq Ready-To-Go PCR Beads 27-9559-01	4	外務省	STR病院
EthidiumBromide Solution H5041 10ML	1	外務省	STR病院
合成DNA 19mer 0.02 μ mol	1	外務省	STR病院
合成DNA 20mer 0.02 μ mol	2	外務省	STR病院
合成DNA 21mer 0.02 μ mol	1	外務省	STR病院
合成DNA 23mer 0.02 μ mol	1	外務省	STR病院
合成DNA 24mer 0.02 μ mol	1	外務省	STR病院
QIAamp Viral RNA mini kit(50)	1	外務省	STR病院
Ready To-Go RT-PCR Beads 96回	1	外務省	STR病院
合成DNA 16mer 0.02 μ mol	1	外務省	STR病院
合成DNA 17mer 0.02 μ mol	1	外務省	STR病院
クラミジアF	1	自己資金 (早川 智氏寄贈)	STR病院
クラミジアR	1	自己資金 (早川 智氏寄贈)	STR病院
結核 F	1	自己資金 (早川 智氏寄贈)	STR病院
結核 R	1	自己資金 (早川 智氏寄贈)	STR病院
クラミジアF	1	外務省	STR病院
クラミジアR	1	外務省	STR病院

消耗機材関連

機材名	個数	資金	設置場所
50mlコニカルチューブ PP 500個 ファルコン 352070	1	外務省	STR病院
1.5ml チューブ 500イリ ビーエム機器 BM-15	1	外務省	STR病院
マルチ洗瓶 500ml 青	2	外務省	STR病院
丸型フロートラック FRL 20本立て ケニス 3-337-256	2	外務省	STR病院
レインボーラック レッド アズワン 2-3013-02	2	外務省	STR病院
0.2mlチューブ用 プレパレーションラック 5入り アズワン 2-5350-06	1	外務省	STR病院
ワッペンラベル WL-12 アズワン 6-710-02	1	外務省	STR病院
ラックチップ イエロー 96本x10 BM 110-9 6RNEW	1	外務省	STR病院
ラックチップ ブルー 100本x10 BM BIO1000 R	1	外務省	STR病院
フリーズボックス 81本 フリーエス F-01-005 12個	1	外務省	STR病院
広口瓶 250ml IWAKI 71-029-008	2	外務省	STR病院
4個口 OAタップ 3m	1	外務省	STR病院
6個口 OAタップ 3m	1	外務省	STR病院
ラテックスグローブ(M) 100枚	2	外務省	STR病院
ギルソン ピペットマン(p-20,p-100,p-200,p-1000) 各サイド	8	外務省	STR病院
マルチ変換プラグ	1	外務省	STR病院
Nucleo Spin Tissue	50 回分	自己資金 (早川 智氏寄贈)	STR病院
Insta Gene Genomic DNA Kit	100 回 分	自己資金 (早川 智氏寄贈)	STR病院

備品

備品名	個数	資金	設置場所
はさみ	1	外務省	STR病院
ペン	2	外務省	STR病院

テープ	1	外務省	STR病院
なべつかみ	1	外務省	STR病院
軍手	1	外務省	STR病院
ファイル	3	OISDE	STR病院
USB	1	外務省	STR病院

資料

資料名			設置場所
「DNA検査と診断 PCRの活用」(週間医学の歩み 1992年8月29日 Vol 162 No. 9)		自己資金 (早川 智氏寄贈)	STR病院

8-3. 人的投入

日本人プロジェクトリーダー	宮田 隆 (OISDE理事長・日本大学客員教授)
現地調整員(4名)	Dr. Aloungadeth (ヘルスサイエンス大学副学長)
	Dr. Sengphouvanh (ヘルスサイエンス大学歯学部学部長)
	Dr. Bunnhong (ヘルスサイエンス大学歯学部副学部長、地域歯科医療学科科長)
	Dr. Bounsai (ラオス国立大学医学部学部長、現OISDE現地代表)
現地調整員(事務)	Dr. Chittakone(ヘルスサイエンス大学歯科医師)
国内調整員	齋藤みどり (OISDE職員)
日本人専門家(10名)	嶋田浩一(日本大学歯学部)
	早川 智(日本大学医学部)
	本橋正史(日本大学歯学部)
	柳澤宗光(OISDE理事・日本大学歯学部)
	落合邦康教授 (日本大学歯学部)
	宮田 隆(OISDE・日本大学)
	佐藤吉則(日本大学歯学部)
	斉藤 毅(日本大学歯学部)
	齋藤志野(OISDE, 中京短期大学)
	伊藤公一(日本大学歯学部)

9. プロジェクトの成果

9-1. 事業目標の達成度

1) 事業目標① ヘルスサイエンス大学および地方核病院における感染症予防に対する知識の普及及び実務研修

実務研修に関しては、当初の計画通りラオスヘルスサイエンス大学のスタッフを対象にした研修と核病院スタッフに対する研修をおこなうことが出来た。日本大学医学部、歯学部の技術協力により、大学スタッフに対する研修は計画の27回を1回超え28回行い、予定していた研修科目全てを終了した。

知識の普及を検証するため、大学スタッフには終了試験を課し、感染症センターで働く検査技師には実践を課すことをおこなった。地方核病院に関しては特に試験を課すようなことはしなかった。大学スタッフの終了試験は「プレゼンテーション」という形で10月24日に実施された。試験官はヘルスサイエンス大学歯学部学部長の Sengphouvanh 歯科医師と大学の試験審査会Akao医師が担当し、全ての研修生 9 人が合格した。また、この試験では研修生同士での評価、自己評価も

行いお互いの理解度、自らの理解度の確認をした。評価方法はヘルスサイエンス大学の意志を尊重し、大学で使用されている以下の評価方法を用いた。

評価方法

スコア方法:1~4までの4段階評価

4 優 3良 2可 1不可

審査項目:プレゼンテーションスキル、内容、理解度



研修生同士の評価(左写真:評価会の様子)では、研修生全員が審査項目の全ての平均が3以上を達成し、自己評価でも全ての項目で3以上を達成した。プレゼンテーションで問題であったのは、知識の普及が出来ていなかったことではなく、英語でのプレゼンテーションスキルがなかったことであった。これは、今回の研修では特に指導しておらず、ラオスでは大学生がプレゼンテーションをすることが一般的ではないために、当然の結果であるといえる。研修生同士で

の評価・自己評価をし、話し合うことで、自らが自らの改善を行うきっかけとなり、主体性を持つ、という点で大変効果があった。そのため、評価の結果そのものより、この研修とプレゼンテーションで研修生のモチベーションの向上、主体性の向上が見られたのは継続性を必要とする保健教育にとっては大きな成果であったと思われる。

感染症センターの検査技師に関する知識の普及の検証のためにおこなった「実践」という課題については事業開始後の6ヵ月後の2007年に既に達成しており、技師自らがプライマー(試薬)を購入するなど積極的な取り組みが見られ、知識の普及に関する問題点は全くないと言ってよいと思われる。また、日本人専門家の協力を受けて4月以降はインターネットを通して指導を受ける、責任者であるDr. Viengvansayが専門家として参加した日本大学医学部の早川教授のもとで来年4月から3ヶ月間感染症診断の研修を受けることが出来るようになったなど実施前に期待されていた成果以上のものがこの活動から見られる。

地方核病院では特に試験を課すようなことはしなかったが、くり返しの講習により、病院内での治療が増え、加えて小学校での保健教育をヘルスセンターのスタッフが計画するなどモチベーションの向上がみられた。

2) 事業目標②ヘルスサイエンス大学医学部及び地方核病院に対する感染症予防センターの設立

ヘルスサイエンス大学構内と、ヘルスサイエンス大学附属病院セタティラート病院内に感染症予防センターの設立を開始した。開始時には何もない状態であったので、まずは、この2つの施設でのセンター設立を試み、地方核病院へ広げていく予定である。8-1.、8-2. で述べたように、多くの資機材、消耗品が外務省NGO連携無償資金協力の支援金で投入され、本法人の資金、専門家の寄付、ヘルスサイエンス大学自らの資金も加わり、設備は充実してきたといえる。主に、ヘルスサイエンス大学では、実習室、講義室を整備、セタティラート病院では PCR とその付属品、試薬、消耗品を新しく設置した臨床検査室に整備した。



左) 感染症診断機PCR機材他

右下) デンタルユニット

左下) 超音波スケーラ



10. 項目別効果の検証

項目	結果	備考
有効性	A	事業目的は達成された
効率性	A	特に感染症診断のための検査技師育成に関しては事業は想定以上に早く進んだ。
インパクト	A	研修を受けた医師らが今以上に感染症について理解を深めたいという思いを表現していること、フィールドワークでは地域の医師、学校の教員らに自ら進んで知識を伝播していること、そして医療環境改善のための提案を始めていることを見ると上位目標に向けた具体的な動きがあると思われる。また、検査技師に関しても自らが日本人専門家に支援を要請、日本への留学を計画、自前で試薬を購入し活動を行っている。地方核病院スタッフに関しても自前で学校保健の取り組みを提案するなど、事業のインパクトは強かったと評価できる。
自己発展性	B	人材は育ちつつあり、事業参加者はとても積極的に今後の活動を行う意欲を見せているが、カウンターパートの資金不足とプロジェクトリーダーとなりうる若い世代の人物の不足により、今すぐの撤退からの自己発展は難しいと思われる。ただし、将来的には大きな期待ができる。
事業の妥当性	A	ラオスのように感染症が多い地域での感染症専門家育成は妥当であり、それを確実に診断できる技師、地域で教育できる医師の養成も必要不可欠である。
その他	B	今回の事業の直接の受益者としては医師・歯科医師・検査技師ということになるが、彼らは今後社会的弱者のために活動していくことを目標としている。

11. 今後の展開

今回の事業は医師・歯科医師・検査技師を対象に行い効果も早い段階で見られた。しかし、これは感染症予防のためのたった一步に過ぎず、これから先どのように育成された専門家がより専門の知識をもち実際の活動でその知識を活かせるかが今後の課題である。事業目標は達成されたが、感染症専門家の育成を1年間で行うには限界があり、より専門性を高め、実践に移すためには研修生らは今後も継続して学ぶ必要がある。今回、英語力の不足から生徒は講義後に配布物を使用して自己学習を行ったり、研修生同士で教えあうなどの努力が見られ、時間の限られた日本人専門家が、支援を継続する上で地元医師の努力する姿勢は大変重要になると思われる。カウ

ターパートの協力体制、医師・歯科医師のモチベーションはとて高く今後の取り組みに期待が出来るが、やはり資金不足が最大の課題で、現地の自己発展には少々時間がかかりそうである。感染症予防センターの設備も整えられてはきたが、まだまだ必要となる資機材は多く、そのような資機材の確保が課題となる。現在、本法人が日本大学医学部病態病理学系と共同で、日本 NGO 連携無償資金協力を申請中の案件「巡回型診療を応用したラオス・サワナケート(Savannakhet) 村落地域における母子保健の改善－ハイリスク妊産婦への対応と B 型肝炎、HIV 感染、口腔感染等の感染症予防プロジェクト－」では、研修を受けた研修医らが活動拠点であるサワナケートの核病院サワナケート病院と協力し、カウンターパートして活躍することが期待される。具体的には、研修を受けた医師・歯科医師らが感染症に関する専門意識を地方の保健医療従事者に広め、また、感染症診断が出来る人材はこの申請中の事業の実施にあたり、サワナケート病院と連携をして感染症をより正確で迅速な診断を行えるよう取り組んでいく。また、日本人専門家からの技術移転や、必要資機材の供与は本法人が中心となって継続して行い、ラオス人医師がより効果的な感染症予防に取り組んでいくことができるように活動していく予定である。